

わが人生の断片

上

清水幾太郎

わが人生の断片 上 清水幾太郎

文藝春秋

＜著者略歴＞

明治40年（1907）東京日本橋両国に生れる。昭和6年，東京帝国大学文学部社会学科卒業。文学博士。読売新聞論説委員，二十世紀研究所所長，学習院大学教授などを経て，現在は清水研究室を主宰。「社会学講義」「流言蜚語」「現代思想」「倫理学ノート」など著訳書多数。

わが人生の断片（上）

昭和五十年六月十五日第一刷

著者 清水幾太郎

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話（〇三）二六五一一二二一

印刷 凸版印刷

製本 中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

わが人生の断片(上)

目次

昭和十六年——昭和二十一年

徴用と三木清 9

ビルマの高見順 29

ラングーンの日々 49

日本への旅 72

新聞社の内部で 92

敗戦の日 112

スターリンの夢 132

明治四十年——昭和十六年

微禄の涯 155

偽善の勧め 176

地震のあとさき 197

社会学へ向って 217

習作時代 238

東大のうちそと 259

悲しい処女作 282

わが人生の断片(下) 目次

明治四十年——昭和十六年(続)

唯物論研究会の人々

ミクロの世界へ

昭和二十一年——昭和三十五年

二十世紀研究所

平和問題談話会

「小さな人気者」

内灘へ

さまざまな空港

放心の日々

安保前夜

安保の日誌

美しい季節

わが人生の断片（上）

昭和十六年——昭和二十一年

徵用と三木清

1

昭和十六年十二月の或る日、私たち数人の忘年会が、夕方から本郷の湯島の鳥屋で開かれた。数人の中には、三木清および中島健蔵が含まれていた。豊島与志雄氏も加わっていたような気がする。忘年会といっても、一向に氣勢の揚らぬ会であった。英米を敵とする戦争は、その日から二週間ばかり前に始まっていた。この会で何を話し合ったか、みんな忘れてしまったが、一つだけ覚えていることがある。十二月八日の開戦の半月ほど以前に、阿部知二や高見順のような作家が軍に徴用されて、何処か南方へ連れて行かれたということが私たちの話題になった。「僕たちも徴用されるかな」と私が独語のように言ったのを聞き咎めて、三木清が、「そんな馬鹿なことがあるものか。われわれを徴用したら、あちらが困る」と強い調子で言い、中島健蔵が「そうだ」とこれに和した。しかし、既に徴用されている阿部知二や高見順にしても、私たち同様、リ

ベラリストと見られている人間ではないか。そう言おうと思ったが、私は、「そうかな」と曖昧に受けて、その話を切り上げた。

三木清は、私より十歳の年長、中島健蔵は四歳の年長である。しかし、年齢とはあまり関係なく、何時からか、私たちの間の役割が決っていたようである。他の人々に対しては別であったのであろうが、私の接した限りの三木清という人は、何を話す時でも、必ず断定的であった。確率が1か0かであって、「そうかも知れない」や、「ひょっとすると……」という調子の灰色の部分が出ていた。彼の文章には、「……であろう」という、持って廻った表現が非常に多く、或る時期の私には、それが一つの魅力であったのだが、会話では何時も断定的で、また、殆ど例外なく、中島健蔵がそれに賛成し、多くの場合、私は煮え切らぬ態度を取っていた。忘年会の時も、このパターンの繰返しであった。このパターンは、昭和研究会の文化部会での私たちの接触から生れたような気がする。

この二人との最初の接触は、昭和六年春に私が東京帝国大学文学部社会学科を卒業して、社会学研究室の副手になった頃に遡る。当時、中島健蔵は同じ文学部のフランス文学科の助手を勤めていて、私はよく便所で彼に出会った。そのうち、お互いに挨拶するようになったが、便所以外の場所では出会った記憶はない。三木清に初めて会ったのは、その年の初夏の頃であった。卒業の直後、卒業論文の一部分が、谷川徹三氏の好意によって、同氏が和辻哲郎、林達夫の両氏と共に編輯に当たっていた岩波書店発行の雑誌『思想』に載せられ、それから間もなく、三木清から葉書を貰った。論文を面白く拝見しました、近いうち、是非、拙宅へお立ち寄り下さい、という意味の文面が、マッチの棒を律義に並べたような書体で書かれていた。当時、彼は知的ジャーナリズム

ムの最高の地位に立っていた。私たちインテリに対して、他の誰よりも大きな影響力を持っていた。その前年、地下の日本共産党に資金を提供したという嫌疑によって検挙され、起訴され、拘留され、有罪の判決を受けたことは、却って、彼の権威を高めたように思われた。その三木清から思いもかけぬ葉書を受取った時、暫くの間、私は一種の恍惚の状態に陥っていた。数日後の午前、中野の宮前二十四番地の家に彼を訪ねた。彼と向い合った洋間のレースのカーテンを通して、日光がテーブルの上に射していた。それ以来、そう密接ではなかったが、彼との交際が続いていた。

二人との交際が急に厚みを増したのは、昭和十三年の秋であろうか、後藤隆之助氏の主宰する昭和研究会に文化部会が設けられ、その責任者になった三木清が中島健蔵や私を文化部会のメンバーに誘った時期からである。昭和研究会というのは、謂わゆる国策研究団体で、後藤隆之助氏が友人の近衛文麿の政治活動を助けるために作ったブレイン・トラストであった。最近の岡義武氏の『近衛文麿』（岩波新書、昭和四十七年）などを読むと、彼に対する後代の評価は自ら異なるようであるが、あの時代の空気の中では、近衛文麿という天皇に最も近い貴族だけが、天皇の統帥権を楯に政治を壟断する軍部を抑えることが出来るように思われていた。リベラルで清新な雰囲気、彼を包んでいるように見えた。一部のインテリや官僚は、昭和研究会の活動に参加することによって、日本の政治を新しいコースに乗せることが出来るのではないかと感じていた。

文化部会の研究会は、丸の内仲四号館の昭和研究会事務所、相当の頻度で開かれた。その主たる成果は、「新日本の思想原理」（昭和十四年一月）と、その続編「協同主義の哲学的基礎」（昭和十四年九月）とで、それぞれ、小冊子として印刷され、或る限られた人々に配布された。現在

は、『三木清全集』第十七卷（岩波書店、昭和四十三年）に「資料」として収められている。よく覚えてはいないが、研究会のメンバーは、矢部貞治、福井康順、菅井準一、中島健蔵、船山信一、私、それに、時々、笠信太郎が顔を見せていた。何人かの報告者の話を聞いた後で、三木清が草稿を作り、それをメンバーが検討して、注文をつける、という、多くの研究会で用いられる手順が私たちの間でも用いられた。しかし、検討とか注文とかいっても、問題になるのは、枝葉の点であった。三木清が断定し、中島健蔵が賛成し、私が煮え切らない態度を取るというパターンは、この研究会が回を重ねているうちに生れたように思われる。いや、それだけではない。右のリストから落してしまったが、三枝博音氏さいぐさひろとのことに触れなければ、あのパターンの説明は終わらないであらう。

研究会が出発して或る期間が経った後に、三枝博音氏が参加するようになった。どういう事情で参加するようになったのか、それが判らないのが残念であるが、何れにしろ、三木清の希望、推薦、少くとも、了解があつてのことに違いない。それ以外に考えようがない。しかし、研究会の席上、三木清が彼に対して示した態度は、非常に意地の悪いものであった。私は、毎回のように、彼に対する三木清の軽侮と嘲笑とを見た。この軽侮と嘲笑とは、私などが一度も経験しなかったものであり、また、希望、推薦、了解と両立し難いものに思われた。先週の研究会で三木清が述べたのと同じような意見が今週の研究会で三枝博音氏の口から出た途端に、「そんな馬鹿なことはない」と三木清が強い調子で押し潰すようなこともあった。どういふ事情で三枝博音氏は入会したのであらう。また、なぜ退会しないのであらう。私には、それが不思議で堪らなかった。彼は三木清より五歳の年長、後者が京大の出身であるのに対して、彼は、東大の出身、専攻は同

じ哲学。それがマイナスに働いていたのであろうか。それとも、もっと深い事情があったのであろうか。しかし、どんな場合でも、三枝博音氏は温厚な態度を崩さなかった。それにしても、私が早くから三枝博音氏と知り合っていなかったら、こういうことは、夙に忘れてしまっていたのであろう。しかし、私は、初めて三木清に会ったのと前後して彼に初めて会い、非常に親切に取扱われ、その後、一緒に唯物論研究会の幹事を勤める過程でも親しく交際して来たり、昭和三十八年の国鉄鶴見事故で不幸な死を遂げるまで、彼はいつも私に寛大であった。初めて吉祥寺のお宅へ伺ったのは、昭和六年がヘーゲル死後百年に当るのを記念して、『思想』が「ヘーゲル特輯」を編むことになり、ヘーゲル研究家でもない私に「ヘーゲル文献」という長大な書目の作製を依頼して来たのが機縁である。私は、二年ほど前から『ヘーゲル及弁証法研究』という専門雑誌を編輯していた彼を訪れて、いろいろと助言を求めた。彼は親切に私を迎え、惜しみなく助力を与えてくれた。実を言うと、お宅へ伺うまで、私はそれを期待していなかった。彼は、岩波書店とも、『思想』とも殆ど何の関係もなく、「ヘーゲル特輯」自身、彼を無視して編まれていたのであるから。私がもう少し事情に明るかったら、本当は、三枝博音氏の助力を仰ぐべきではなかったであろう。しかし、軽率であったと気がついたのは、或る期間を経た後のことであった。とにかく、私は、十五歳も年少の私の失礼な注文に応じてくれた彼の温い態度が忘れられなかった。研究会の席上、彼を弱い敵のように扱う三木清の断定と、それに対する人々の賛成とを何度も見ているうちに、私は、せめて、煮え切らない態度を取ることによって、孤独な三枝博音氏への同情を示すという不幸な癖が身についてしまったようである。

私たちが湯島の鳥屋を出たのは、九時頃であった。重い外套の襟を立てて、万世橋を渡り、須田町の交差点を右折して、右側の小さな喫茶店へ私たちは入った。紅茶を注文したら、ウィスキーを滴してくれた。

私たちが万世橋を渡っている時、三木清は、突然、大きな声で、「兵隊さんよ 有難う」(皇軍将士に感謝の歌)を歌い始めた。

肩を並べて兄さんと

今日も学校へ行けるのは

兵隊さんのお蔭です

お国のために

お国のために戦った

兵隊さんのお蔭です (橋本善三郎作詞・佐々木すぐる作曲) (©日本音楽著作権協会承認番号五〇〇四〇一号)

彼が好んで歌を歌うことは、以前から知っていた。昭和研究会の会合の後で、しばしば、銀座裏の「エスパニョル」というバーに寄り、そこで「花も嵐も踏み越えて……」という「旅の夜風」を歌っていた。何時か、私も歌詞を覚えてしまった。彼の歌には驚かなかったが、「兵隊さんのお蔭です」という個所にかかると、彼は異様に声を張り上げた。私たちが止めても、彼は歌い続けた。彼には、こんな無茶な戦争を始めたのも、「兵隊さんのお蔭です」という気持が強かったのであろう。同じような気持は、勿論、みんなの内部にあった。